

日本の計量史の創始者 狩谷棧齊讃歌

日本計量史学会特別講演

日本計量会館 三階 会議室

2019年3月20日(水)

新井 宏

Arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp

はじめに

- **狩谷棧齊**について、あるいはご存知ない方もいらっしゃるかも知れませんが、「日本の度量衡史の創始者」として、我々の大先輩の**天野清**、**小泉袈裟勝**、**岩田重雄**ら崇める大学者です。しかし、『計量史研究』を読み返して見ても、「断片的な評伝」さえ載せられていません。
- 私は既に、数学的・計量史的なアプローチによって奈良時代の研究に大きな足跡を残した**沢田吾一**の評伝を『計量史研究』12年前に載せたことがあります。この評伝は何かと話題になり昨年の『季刊邪馬台国』134号にもそのまま転載されました。

はじめに

- 今回は十年ほど前に『**狩谷掖齊讃歌**』として書いた評伝を特別講演としてお話ししたいと思います。
- 別刷をお手元に配布していますが、これを読み上げるだけで、5時間くらい掛ります。一時間の講演時間では、早口になるかも知れませんが、御容赦頂きたいと思います。

森鷗外が評伝を志して ついに書けなかった狩谷掖齋

- **森鷗外**は晩年の名作『**伊澤蘭軒**』『**渋江抽斎**』『**北条霞亭**』の三部作を書きましたが、ついに一番書きたかった『**狩谷掖齋**』は書けませんでした。
- そのことを知り、掖齋の研究から多くを学び、お礼の意味を含めて、評伝を書きたいと思ったのは、もう30年ほど前のことです。せっせと国会図書館に通い資料集めをしていました。
- 最初は私だけの「度量衡史の掖齋」でしたが調べれば調べるほど巨大に聳えてくるではありませんか。清国の考証学者**愈曲園**(ユキョクエン)が日東第一の学者と称賛していたことを知るとシュンとしてしまいました。

梅谷文夫の『狩谷棧齊』

- その追打ちとも言うべきものが、平成6年に出された**梅谷文夫**の『狩谷棧齊』です。生涯を棧齊の研究に捧げた梅谷文夫の学問的な態度は、まさに棧齊そのものでした。「信憑すべき証拠が得られない場合は、判断を留保し、私見をもって真偽を論じない」と言う棧齊の信条そのままに、極めて抑制した記述で、見事に棧齊を描ききっている。
- その上更に、**梅谷文夫**は『**狩谷棧齊年譜**・上下』)を出す。900頁にも及ぶ詳細極まる年譜。日記を残さなかった棧齊です。私は、世界中でこれほど詳細な個人年譜を書いた例を知りません。すさまじいエネルギーです。もう私の出番はない。

評伝『狩谷棧齊』に再チャレンジ

- 棧齊に導かれて成し遂げた「**古韓尺研究**」でした。幾多の幸運に支えられ、基幹的な研究論文や、一般向けの読み物『理系の視点からみた考古学の論争点』も平成19年までに紹介できました。
- 結局、**古代計量史における大問題は棧齊の考証が正しかった**。後世、現代の学者達が多くの資料を棧齊に仰ぎながら、むしろ誤りを肥大させてしまった。棧齊から学ばねばならない。
- そうだ。棧齊の評伝にもう一度チャレンジしよう。巨大な学者、棧齊の新側面を発掘するなど、大それたことを考えるのではなく、我が心象に捉えた棧齊へのラブレターなら書けるかも知れない。

江戸時代の度量衡研究

著名な学者は全員見解を発表

- 今回は「計量史学会」の講演である。まずは狩谷棧齊の「度量衡史」の凄さの極く一部分でも紹介してから、私のラブレターの紹介をするのが手順であろう。
- 国が乱れれば度量衡も乱れる。江戸時代に入ると儒学者を中心にして度量衡に関する関心が急激に高まった。そのため江戸時代の学者の多くが、自説を著書として発表しています。決して現在のようにマイナーな研究分野ではなかった。例えば、次の表に示すように非常に多くの学者たちが、それぞれ論考を発表しています。

『隋書律歷志』基準尺に対する 江戸期の学者の見解

歴代学説	著書・論文名	生年-没年	晋前尺推定長	
			由尺	cm
林 鷺峰	本朝通鑑	1618-1680	0.64	19.42
中村惕斎	律尺考験	1629-1702	0.783	23.76
中根玄珪	律原発揮	1662-1733	0.656	19.91
荻生徂徠	度量衡考	1666-1728	0.7196	21.84
伊東東涯	制度通	1670-1736	0.6	18.21
荷田在満	度量略考	1706-1751		
西村遠里	数度宵談	1718-1787	0.72	21.85
田村西湖	度量小識	1745-1793	0.7833	23.77
藤 貞幹	集古集・旧譜・ 金石遺文等	1732-1797	0.74~	22.46
			0.80	24.28
最上徳内	度量衡説統	1754-1836	0.75	22.76
狩谷棧齊	本朝度量権衡攷	1775-1835	0.76	23.06
平田篤胤	皇国度制考	1776-1843	0.745	22.61
藤田元春	尺度綜考	1879-1958	0.8	24.28
丘光明ほか 中国計量史の定説				23.10

藤田元春の『尺度綜考』

- 昭和4年出版、出版文化協会の推薦図書となった『**尺度綜考**』は**歴史考古学関係者に度量衡史のバイブル**として大きな影響を与えた。
- しかし**小泉袈裟勝**は「とうてい科学的な考証に耐えるものでなく、狩谷掖齊の著述から大量に引用しているが…はるかに後退したものになっている」と云う。
- **天野清**も「確たる論拠もない昔の尺度を並べたて…真しやかに書いたり…幼稚な記述…誤った無断引用…我が国に狩谷掖齊の名著があるのに」と痛烈である。
- **狩谷掖齊が23.1cmと正しく考証した隋書の基準尺を藤田元春はもう一度24.3cmと誤ったほど**である。

狩谷掖齋の肖像

江戸の豪商米問屋「津軽屋」

掖齋望三

天保六年閏七月四日 六十



津軽藩の御歳元「津軽屋」
250石→1000石



津輕藩米問屋「津輕屋」

- 津輕藩の米問屋「津輕屋」は天保大飢饉の最中、津輕藩に対して**金12万7569両**の巨額債権を放棄した。その功により300石加増され**1000石**となる。町人ではあるが豪商であった。椛齊はその津輕屋の婿養子。
- 先代の津輕屋に嗣子なく、紆余曲折の末、三女の14歳の善(ヨシ)に婿を迎えることになりました。しかしどんな縁談も善は受入れません。当時既に大きな書肆**青裳堂**の当主であった**椛齊**に嫁ぐのが幼い善の希望でした。椛齊は善の一途さをいとおしく思いました。これが大学者、椛齊を生みました。
- 二人の間に生れた**多加は今少納言と称されほどの才色兼備**。おそらく善もそのような女性だったと思います。

生立ちと師事

- 椋齊は1775年江戸の**神田明神石坂下**で生れている。津軽屋のあった湯島一丁目の台地下の横町である。
- 書肆の生まれで読書好学の風があり、15歳頃から、古書の書写を精力的に進め、1790年には書を求めて、第一回目の上方旅行を行っている。その頃家督継ぐ。
- 儒学を細井平洲の女婿、泉豊州に学んだ。同窓に終生の友、**伊澤蘭軒**がいた。
- その後椋齊は国学者の**村田春海**や**屋代弘賢**に学ぶ。屋代弘賢からは書も学んだ。

学問的な傾向

- **村田春海**は国学者でありながら、**本居宣長らの古道説や漢学排斥に**反対していて、儒学に対しても偏見を持っていなかった。これが、**椋齊**の学風を広く公正なものとなりました。
- 1798年には、**藤貞幹**の『**衝口発**』を校読している。古代日本について中国や朝鮮などと**比較文化史的な視点**から考証した書で、日本文化固有説に疑問を呈すなど現在の史観にも通ずる内容が多くあり、**椋齊**にとっては学ぶ点が多かった。
- **椋齊**が**宣長**よりも**貞幹**に興味を持っていたのは間違いない。貞幹の発想に学び、それを実証的に越えたところで**椋齊**は成長した。

第二回上方旅行

- 古書を求めて第二回目の上方旅行をしたのは1787年、23歳の時です。この時、中国では散逸していた書物を価格は30両を越えて購入しています。
- また松永貞徳の法華経の刊本を反古にして籠を張っているのを見つけ、残部にも手を廻して集めた。
- **藤貞幹**の書『衝口発』を出した竹苞楼を訪ねたはずである。**貞幹は尺など古い計量器を集め、複製し、時には偽造した人物で、計量史研究でも登場する。**
- 帰路、**松阪鈴屋に本居宣長**を訪ねている。

本居宣長と古事記

- **本居宣長**は、狩谷棧齊の対極にあった学者で、明治維新の思想的なバックボーンとなった神がかり的な天皇制教学すなわち『古事記伝』を書きました。
- 宣長の古事記研究は、日本の古語読法の実証的な研究もあるが、何よりも**観念的な思想**に満ちている。
- **古事記の評価は偽書説がむしろ主流**かも知れない。しかし明治維新で『古事記』の聖典化が進行してからは、アカデミズムにとっても、古事記が偽書であってはならない存在となってしまった。
- これらの論争には、私も多大な関心を持っているが、今日はふれない。**棧齊は学者、宣長は宗教家**であった。

津軽屋相続

- 1799年、24歳の椋齊と14歳の善は祝言を挙げ、津軽屋を相続する。
- 津軽屋は、湯島組に所属する米問屋で、津軽藩の江戸御蔵元を勤めていた。
- 津軽藩は**表高は4万6千石**に過ぎませんが、**実高は30万石程度の大藩**でした。**津軽平野を擁し新田開発に取り組んだ結果**である。
- 津軽屋は米問屋としての独立性を維持しながらも、御蔵元として、藩の勘定奉行支配に属し、藩からの石高換算では250石ほどの給与があった。

畢生の著『和名類聚抄』の校読

- 椋齊は、家督相続翌年には**畢生の著**となる『和名類聚抄』の校読を始めている。『和名類聚抄』は、源順が編纂した初の百科事典ともいえるべきもので、和語の語義や地名の由来を知るに必須の書でした。しかし、原本や写本がなく、伝本には異伝、誤りが非常に多かった。
- そのため椋齊は諸本に箋注を施し、誤謬を正し、誤りの箇所を明らかにして、『**箋注和名類聚抄**』を著した。これが狩谷椋齊の代表作です。
- その関係で椋齊は『遊仙窟』という唐代伝奇小説の校読も行っています。平安時代に宮廷で読まれ、その訓が古い日本語を良く伝えているのだと言う。

林門(昌平黌)の俊英、市野迷庵

- 結婚後大病に罹ったが、回復して待望の第一子、懐之(カネユキ)が生まれた。椋齊は30歳、善は19歳。
- その頃、10歳年上で林述斎(昌平黌:朱子学)に学んだ町人の俊英・儒学者**市野迷庵**に会う。その時、椋齊は四書五経などの儒学の解釈を巡って、漢や唐の見解も重視すべきではないかと質問しています。しかし迷庵は宋儒の解釈(**朱子学**)によらねば、実用に適さないと**諭しました**。それから凡そ20余月、朱子学の伝注を鋭意研究した結論は、宋儒(朱子学)は「心を師とし」宣長の国学と同じく学問ではなく思想だと看破したのです。
- 迷庵の素晴らしさは、ここで「幡然として心折り」今までの学風を棄てて、漢学に従うようになった。

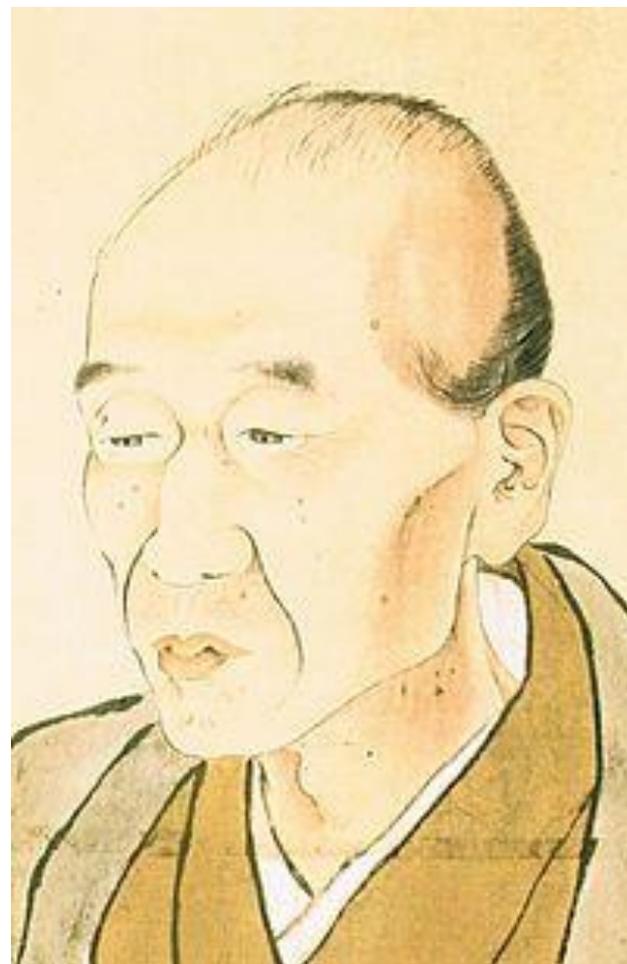
松崎慊堂

- 椋齊が**松崎慊堂**を知ったのも長女が生まれた頃である。慊堂は林門(**昌平黌**)では**佐藤一斎**を凌駕するほどの実力者であった。
- しかし同僚の罪の責任を問われ、塾頭には佐藤一斎が選ばれました。1823年から1844年まで、膨大な『慊堂日歴』を残していますが、江戸後期の研究のためには必見の資料です。
- 慊堂の人柄の素晴らしさは弟子の**渡辺崋山**が蕃社(尚齒会)の獄で死罪となるのを、身を賭して救った行動で良く知られています。佐藤一斎は逃げ回っていました。
- 友を見れば、人物が分るという。椋齊を語らなくとも、迷庵や慊堂を語れば、自ずから明らかになることがある。

松崎慊堂



松崎慊堂肖像



善の死と二女多加

- 1806年、椋齊は次女**多加**の産褥の病で善を失う。幼児三人をのこして妻に先立たれた椋齊は、**後妻を娶ることなく、子供たちを育てあげる。**
- 善を想うには、**次女多加**の姿を通すことになる。多加のことは森鷗外の『伊澤蘭軒』に詳しい。**今少納言**と称される才女であった。
- 和漢の書に通じ時には父に代わって歌や文を書きましたが、いずれが**多加**か**椋齊**かと言われたほどでした。特に仮名文字の美しさは歎賞すべきだと**鷗外**は述べています。
- 27歳で**伊澤蘭軒の三男で同年の柏軒**に嫁いでいる。

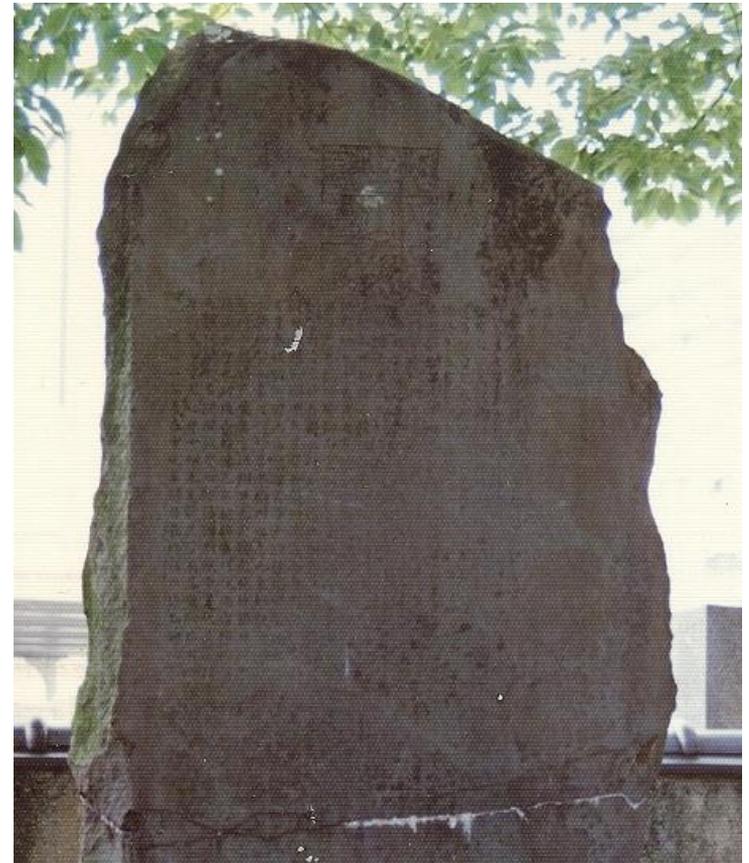
説文解字

- **多加**が生まれた頃、**椋齊**の『説文解字』の研究が本格化している。『説文解字』略して『**説文**』は、後漢の許慎が西暦100年に書いた最古の部首別の漢字字典で、漢字の成り立ちを解説し、本義を記している。
- まず『説文検字篇』を作成した。江戸時代に作られた唯一の説文の索引でデータベースである。
- 説文研究は、椋齊の時代に中国の研究水準を一部では超える。**データベースの椋齊、総合研究の松崎慊堂、内容研究の山梨稻川**を世に「**説文の三絶**」という。
- 静岡駅から徒歩三分の宝泰寺境内に建つ**山梨稻川**の墓碑は**慊堂**が碑文を撰し、**椋齊**が筆書している。

山梨稲川（稲川会 山梨一家？）

山梨稲川の碑 静岡駅3分宝泰寺

松崎慊堂 碑文、狩谷掖齋 筆書



山梨稲川

- **山梨稲川**は静岡県庵原(イハラ)の名主、慊堂と同年で榎齊より四歳年上。稲川の研究は、漢字の部首のうち、右側に位置する旁により漢字を分類するという独創的なもので、漢代以前の古音に気付いた最初の学者である。日本ならではの研究成果であった。
- 稲川は**独学の漢詩人**で中国清末の碩儒、俞曲園が日本人の漢詩を編集した際に稲川の詩を68首も入れた。ちなみに、荻生徂徠は43首、新井白石は14首である。
- 榎齊と稲川は面識がなかった。榎齊が駿河の薩陞峠に遊んだ時に、お酒を酌み交わした行きがかりの人物がいた。漢字に詳しい稲川という学者を知っているかと問うと知っていると言う。榎齊は数日後に駿府に稲川を訪れ再会し、驚き喜び、掌をうって笑った。

説文解字

- 日本における『説文解字』の研究水準が、一部で中国を超えていたのは、異なった時期、異なった地域から導入された漢字の発音が「古音」「呉音」「漢音」「唐音」など多様な形で残っていたからである。
- **台・怡・始**などが、『説文』ではタイ、イ、シと異なる発音であるが古音では全て「タイ」であったというのである。
- なみに、台を含む漢字の日本の発音例

「タイ」	台胎殆抬給詒駘 怡 殆焔 珩 跽 鉛 鮒
「イ」	怡 台 詒 殆 怡 珩 耜飴
「シ」	始 怡 耜 鉛

求古楼展観と書誌学

- 書肆出身の椋齊は、もともと蔵書家でもあった。二万巻の蔵書とか**茶器一万両、書物一万両、有金一万両**とか云われている。
- 椋齊は、1815年から求古楼を会場として、市野迷庵、伊澤蘭軒、多紀苴庭(サイイ)、小島宝素、屋代弘賢などの愛書家とともに、書籍閲覧会を開催している。他に紅葉山文庫の書物奉行・**近藤重蔵**もいた。
- この時、**椋齊が出品した南宋版の『史記』は、明治維新後に中国に渡り、現在の『史記』の底本**になった。
- 求古楼展観は、**最初の本格的な書誌学研究会**であり、その故に、椋齊は日本における**書誌学の創始者**と言われている。

隠居

- 1815年、津軽屋を長男の懐之(カネユキ)に譲り隠居する。椋齋41歳、懐之12歳であった。しかしその後も16年間に渡って懐之を助けており、津軽屋の経営から自由になったわけではなかった。
- 津軽藩から隠居料として100俵16人扶持を受ける。隠居としては破格の待遇である。
- 津軽藩は財政が厳しく、その二年前に、津軽屋から1万9千両の融資を受けているが、その見返りとしての意味もあった。
- それでも多少自由になり、『靈異記』『上宮聖徳法王帝説』『古京遺文』『新撰字鏡』の研究を平行して進める。

三回目の上方旅行

- 1819年、**市野迷庵、松崎慊堂**と連れ立って、四ヶ月間上方旅行に出た。まず駿府に**山梨稻川**を訪問する。
- 伊勢神宮に参詣後、国学研究のセンター豊宮崎文庫の蔵書閲覧。受入れは外宮権禰宜の**足代弘訓**(アジロヒロリ)。当時「天狗」になっていた弘訓に一行は真の学者の凄さを識らせた。
- 奈良では、法隆寺、薬師寺、唐招提寺を訪れ、宝物、書画を拝観。椋齊の代表作となる『**古京遺文**』のための金石文の探索とりわけ、**薬師寺の仏足石**である。
- 一行は、京都に戻り慊堂と迷庵は江戸に帰るが、椋齊は、奈良に戻り職人を連れて仏足石の拓本を採るために七日間を費やした。

薬師寺仏足石



美阿止都久留 伊志乃比鼻伎波
 阿米尔伊多利 都知佐閉由須礼
 知々波々賀多米尔

古京遺文

- 『**古京遺文**』は、平安初期までの金石文32編、薬師佛造像記、釋迦佛造像記、宇治橋斷碑、二天造像記、船首王後墓版、小野朝臣毛人墓版、山名村碑、那須直韋提碑などを考証している。
- 当時の研究は、文献資料に重点があり、金石文などは好事家の道楽とみなされていた中で、いまの考古学的なアプローチをいち早く取り入れ徹底して考証したことから権齊をして**金石学の祖**とするゆえんである。
- **藪田嘉一郎**が昭和49年に『日本上代金石叢考』を著すまで、類書がまったく現れなかった。藪田は『古京遺文』について、比倫を絶する名著とし、知識の該博、方法の正確・鋭利、論断の明快・剴切(ガイセツ)を**絶賛**している。

那須国造碑

那須郡湯津上村。19字×8行
=152字の碑文が楷書で刻まれている。

那須国造顕彰するために、700
年に建立されたものである

文字の一枠は31.7mm

31.7mm = 26.4mm × 1.2

古韓尺の1寸2分です。



釈迦三尊像光背造像記

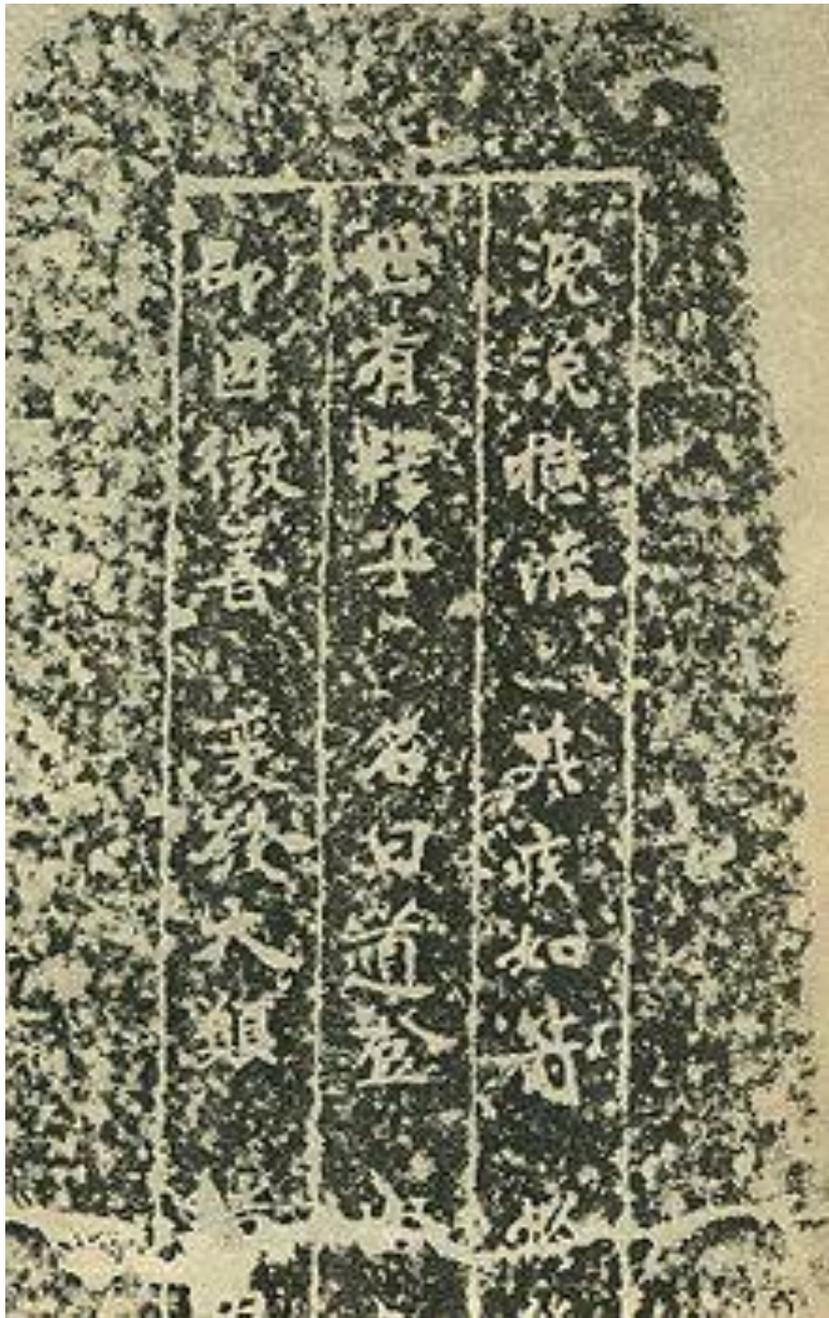


推古31年(623)造像が通説であるが、法皇、知識、仏師などの言葉の使い始めが7世紀末になることから疑問。隷書から楷書への過渡期の書法

銅板の大きさ
38.5cm×37.8cm
 から一字枠を計算すると**26.5mm**で古韓尺の1寸

同光背銘文
 (同前より)

宇治橋断碑



大化2年(646年?)に架橋したことを記しているが、碑自体は721年以後に建てられたと考えられている。美しい楷書。

寛政年間に掘り出され、『帝王編年紀』により補刻。

字の間隔、

$32.0\text{mm} = 26.7\text{mm} \times 1.2$

古韓尺の1寸2分

広開土王碑文



將軍塚・太
 王陵の近く
 にある広開
 土王碑(高さ
 639cm)の
**一文字の枠
 が13.4cm
 で古韓尺の
 5寸に一致**

十七条の憲法

- 「**聖徳太子がいなかった**」ことは歴史学界の常識となった。国民感情で否定する者がいるが、学術問題としては勝負があった。(大山誠一、谷沢永一)
- 聖徳太子の業績の全てが、史料批判により、聖徳信仰として後世になって作られたことが明白になったからである。厩戸皇子は実在したが、「十七条の憲法」や「三経義疏」を作った聖徳太子はいなかった。
- 「十七条の憲法」が聖徳太子の真作ではなく、日本書紀の作者の潤色だと初めて指摘したのは榎齊である。
- 聖徳太子の五つの証拠、十七条の憲法、薬師像光背銘文、釈迦像光背銘文、天寿国繡帳、三経義疏のいずれもが後世に書かれたものと確定してしまった。

『上宮聖徳法王帝説』

- 椋齊が心血を注いで研究した『上宮聖徳法王帝説』は法隆寺に伝わった雑多な綴り合せの総称である。
- 『上宮聖徳法王帝説』の研究者・**家永三郎**は、椋齊が「何等の先行研究なく、一代の努力で権威ある註釈を完成し、爾後それを凌駕するものがない」と**絶賛する**。
- しかし『上宮聖徳法王帝説』は、延喜17年以降の『聖徳太子伝略』を批判しており、日本書紀よりも後代に成立したことがあきらかになった。
- それにもかかわらず『上宮聖徳法王帝説』には、古事記や日本書紀よりも古い記事があることで、その価値はいささかも揺るがないと考える学者達がいる。

『和銅開珍』

- 「和同開珍」は中国外で初めて発行された銭で、日本ばかりでなく中国からも出土する。
- 「和同開珍」は江戸時代には、**開珍(カイチン)**の読みが普及していた。珍は珍の異字だからである。
- 椋齊はこれを開寶(カイホウ)と読んだ。それは「珍」が「寶」から「ウカンムリ」と「貝」を外した省略形だからである。
- 開寶説は明治、大正、昭和の主流となり、学校でもそう教えた。しかし、今ではこれを「和同開珍」とする教科書がほとんどである。
- 「開寶」説を強かに支える見方が現れた。それは大東文化大の**萩庭勇**が『稻荷山古墳の鉄剣を見直す』で「中国文の読み方」の基本として示したものである。

『和銅開珎』

寶貨



四回目の上方旅行

- 1821年中山道経由で**上野三碑**(山ノ上碑、多胡碑、金井沢碑)を実見しながら4回目の上方旅行に向かい、各所で秘蔵の古典籍などの閲覧や影写を行っている。
- 京の医師、福井榕亭(ヨウテイ)秘蔵の『新修本草』巻15を影写する。榕亭は誰にも見せなかったので、棧齊は類書から事前に復元版を準備して臨み、所蔵本がそれほど秘密のものではないことを匂わせ、一夜だけの借り出しに成功した。かくして659年の界最古の薬学書『新修本草』が世に伝えられた。
- 小野妹子の子の『小野毛人墓誌』を実見する。長さ58.9cm、幅5.8cmは、いわゆる唐尺の2尺と2寸である。
- 福山藩儒官で頼山陽・**北条霞亭**らの師**菅茶山**と再会。

小野毛人(エミシ)墓誌

長58.9cm 幅5.8cm

遣隋使小野妹子の子の墓誌
奈良時代(8世紀前半)

京都市左京区上高野出土

唐尺の2尺×2寸



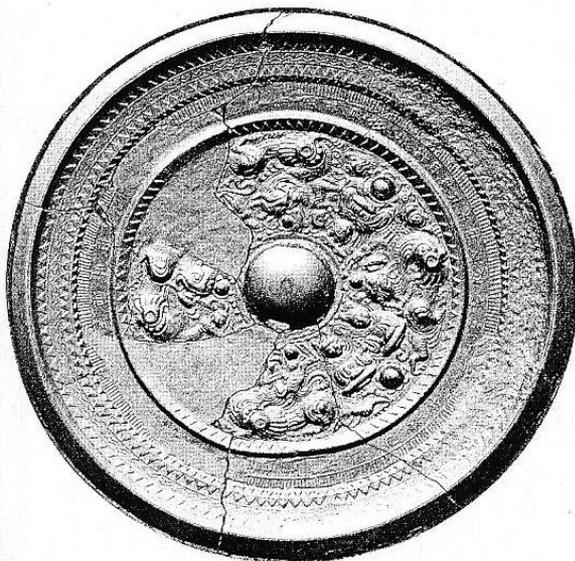
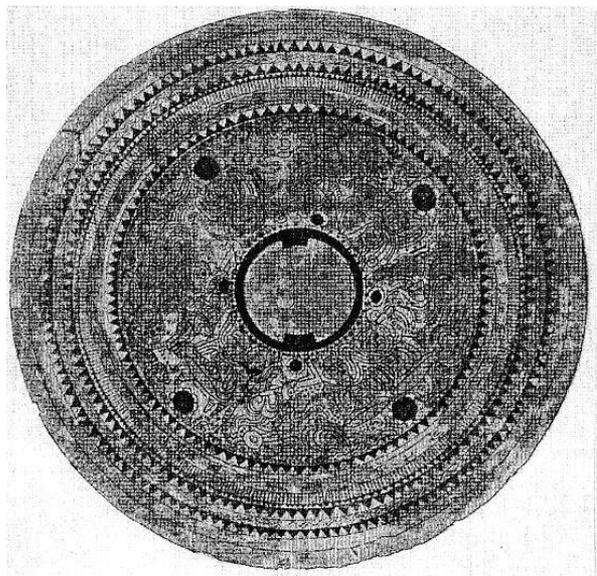
和名類聚抄(ルイジュショウ) 箋注

- 『和名類聚抄』は931～938年に、源順が編纂した漢和辞典、百科事典。漢語を「類聚」して日本語の語源を知るに必須の書。椋齊の『箋注』によって、我が国の古語の意味が定まったのは数え切れない。
- 通常、校訂者は正しいと信ずる内容に修正する。しかし椋齊は、書写の誤りや改変は正したが、内容については、箋注を施すに留めた。本文に10倍する箋注で、その研究態度は、近代文献学の認識そのものである。
- 死の直前には出版の段取りを整えが、津軽藩に金12万7569両の債権放棄で出版中止。結局、**渋江抽斎**の整理した稿を森立之(枳園)が出版するは椋齊死後48年、明治16年(1883)である。

慊堂日曆と三角縁神獸鏡

- 椋齊の生涯の友、松崎慊堂の『慊堂日曆』(東洋文庫6巻)が江戸の歴史研究に裨益したことは計り知れない。
- 椋齊の名は月に1、2回は必ず登場、最も多い文政9年には年に50回以上も名を見る。
- 紹介したいのが椋齊の持っていた三角縁神獸鏡のことである。私は鉛同位体比の解析によって魏鏡説を否定しているがその最初の研究は椋齊によって行われた。
- 椋齊の三角縁神獸鏡について、一般に紹介したのは私が最初とおもうが、その後、研究仲間の銅鏡研究者第一人者**森下章司**が平成16年に書いた論文「古鏡の拓本資料」で触れていた。

慊堂日曆と三角縁神獸鏡



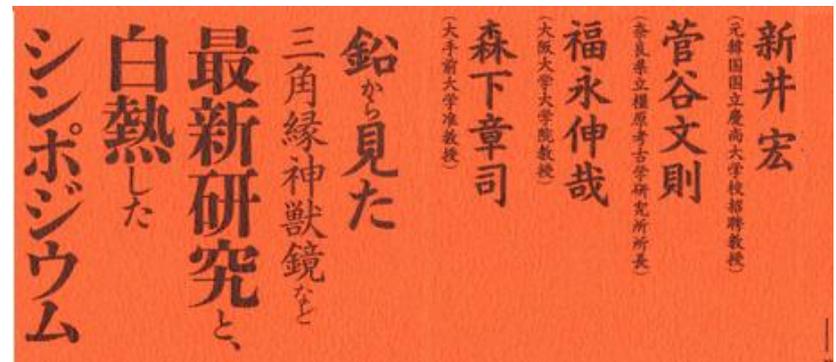
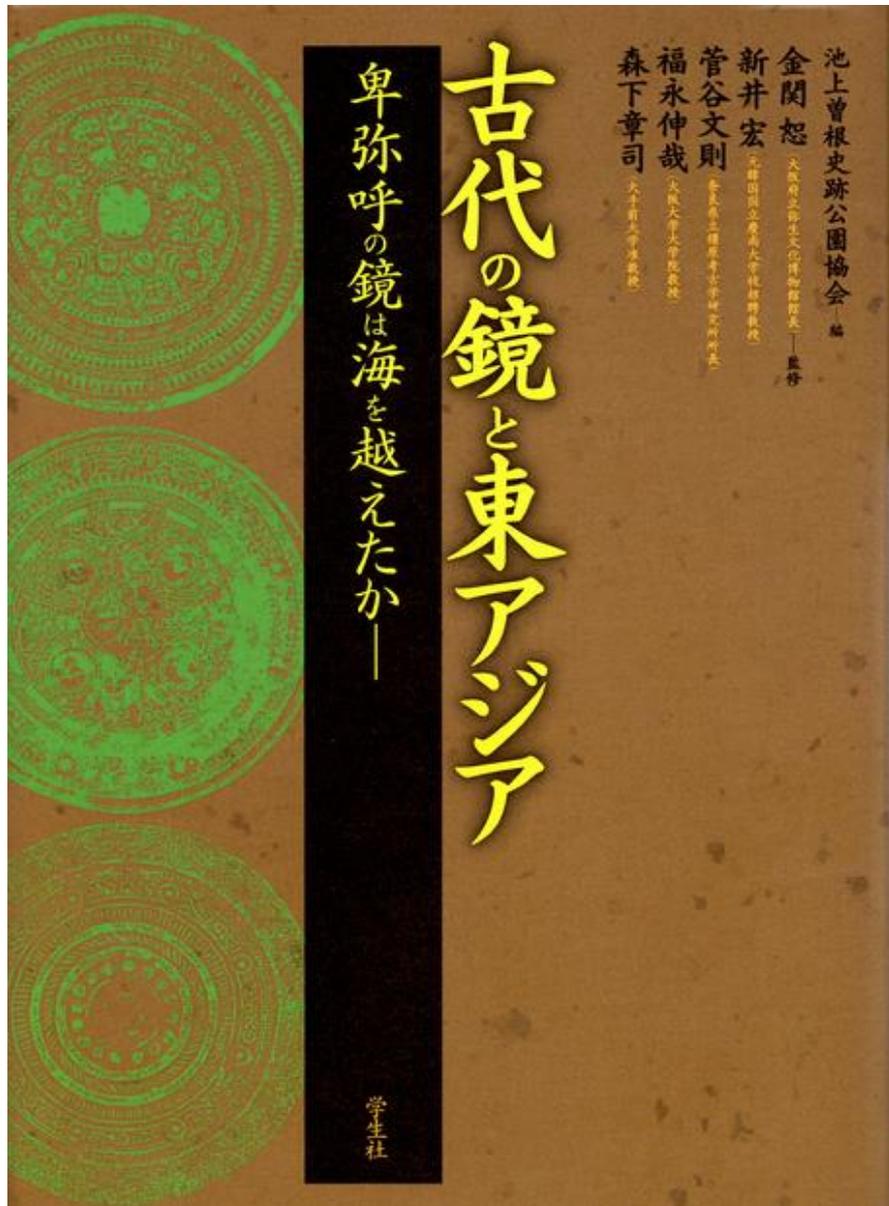
吾作明竟甚大好
仙人王喬赤松子
千秋萬歲不老

上有東王父西王母
渴飲玉泉飢食棗
沐由天下由四海兮



シンポジウム パネラー

- | | |
|--------|----------|
| 金関恕(司) | 弥生文化博館長 |
| 菅谷文則 | 檀考研所長(現) |
| 福永伸哉 | 大阪大教授 |
| 森下章司 | 大手前大準教授 |
| 新井宏 | 慶尚大招聘教授 |



本朝度量権衡攷

- やっと『**本朝度量権衡攷**』についてたどり着いた。東洋文庫に収録された富谷至氏の校訂版で見ても、注釈を含めば600ページを越す大著である。
- 日本の**度量衡史の巻頭を飾る大著**である。椋齊の導きで私は計量史の研究論文を30編近く書いている。しかし、とても短時間で内容を紹介できるものではない。
- 江戸時代は度量衡の研究が非常に盛んであった。名のある学者達のほとんどが、度量衡の解説や論考を書いている。儒教では政治の乱れと「律の乱れ」を同一視していたことであろう。
- そうだ。彼らが揃って触れている『隋書律歷志・15等尺基準』の推論結果を紹介して、それに代えよう。

『隋書律歷志』基準尺に対する 江戸期の学者の見解

歴代学説	著書・論文名	生年-没年	晋前尺推定長	
			曲尺	cm
林 鷺峰	本朝通鑑	1618-1680	0.64	19.42
中村惕斎	律尺考験	1629-1702	0.783	23.76
中根玄珪	律原発揮	1662-1733	0.656	19.91
荻生徂徠	度量衡考	1666-1728	0.7196	21.84
伊東東涯	制度通	1670-1736	0.6	18.21
荷田在満	度量略考	1706-1751		
西村遠里	数度宵談	1718-1787	0.72	21.85
田村西湖	度量小識	1745-1793	0.7833	23.77
藤 貞幹	集古集・旧譜・ 金石遺文等	1732-1797	0.74~	22.46
			0.80	24.28
最上徳内	度量衡説統	1754-1836	0.75	22.76
狩谷棧齊	本朝度量権衡攷	1775-1835	0.76	23.06
平田篤胤	皇国度制考	1776-1843	0.745	22.61
藤田元春	尺度綜考	1879-1958	0.8	24.28
丘光明ほか 中国計量史の定説				23.10

狩谷掖齊『本朝度量權衡攷』紹介の伝世尺

寺院伝世尺	cm	出典	区分
叡山律尺	23.12	1) 2)	儀 礼 用 小 尺
高野山律尺	23.94	1) 2)	
御府尺	24.12	2)	
東寺金蓮院尺	24.67	1) 2)	
槇尾寺尺	24.70	1)	
泉涌寺尺	24.79	1) 2)	
大安寺尺	25.00	1) 2)	
法寿菴尺	25.13	1) 2)	
生駒長福寺尺	25.25	1) 2)	
大師所用尺	26.40	2)	古 韓 尺
東寺長尺	26.70	2)	
后周玉尺	26.75	3)	
空海舶来尺	26.82	2)	
大師所用尺	27.01	2)	
法隆寺尺	29.50	1)	天 平 尺
白牙尺(2本)	29.50	4)	
撥鏤尺(8本)	29.50 ~30.7	4)	

- 1) 狩谷掖齊『本朝度量權衡攷』
- 2) 旧帝室博物館(東博)所蔵
- 3) 『隋書律歷志』
- 4) 正倉院所蔵

計量会館の模造尺

尺名称	会館尺 長さ	京博尺 長さ	平田篤胤 赤県尺	隋書 15種尺	狩谷椽齊
晋前尺	22.70	22.78	22.60	23.10	23.08
淮南禾粟尺	23.20	23.21	22.62		
王朴律準尺	24.40	23.44	23.05		
漢官尺	24.00	23.94	23.33	23.81	23.78
盧僂銅尺	23.90	23.95	23.33		23.82
晋雜尺	24.20	24.21	23.73	24.26	
宋氏尺	24.00	24.37	24.02	24.58	
梁俗間尺	26.00	26.04	24.13	24.74	24.65
明律尺	27.00	26.95	28.17		
隋律呂水尺	26.30	26.42	26.83	27.40	27.31
明律尺	25.40	25.42	25.35		
宋氏尺	24.10	24.16	24.13		24.55
晋後尺	23.80	23.83	24.04	24.53	24.51
魏尺	23.30	23.25	23.73	24.19	24.16
梁法尺	22.80	22.90	25.80	23.26	23.24
周尺	18.20	18.23	18.15		
漢建初尺	26.30				

永眠

- 狩谷椋齊は天保6年(1835)閏7月4日、浅草伝法院前の津軽屋新宅で永眠した。
- 前月の10日以来、食事が採れなかった。死の前日に椋齊を見舞った**松崎慊堂**は「万無一生、而精神如平日、言石經校文・淳化帖事数語、亦如平日、向晚握手而別、暗泣三声、余亦腸断」と『慊堂日曆』に記す。簡潔な漢文は、男の悲悼を適く表現する。61歳であった。
- 椋齊の法名は常関院**実事求是居士**である。「実事求是」の名は椋齊が生前に定めておいたものという。まさに実事求是の一生であった。

狩谷掖齋の墓碑

- 狩谷掖齋の墓碑は全長2メートル余、豊島区巢鴨の曹洞宗法福寺の入り口近くに立っていたが、2011年の東日本大震災で倒壊し断裂してしまった。
- 墓碑撰文は松崎慊堂、書は掖齋の門下生で、日米修好通商条約の原本を書いた名書家の**小島成齋**。
- 篆額は**渋江抽齋**。



おわりに

私淑とは、孟子の言葉で直接に教えは受けないが、私(ヒソカ)にその人を師と考えて尊敬し、模範として淑(ヨシ)とすることだと言う。私は間違いなく榑齊に私淑していた。

もちろん今日では私のように榑齊に私淑している研究者も多いに違いない。日記を残さなかった榑齊について、900字詰めで900ページにも及ぶ詳細極まる『狩谷榑齊年譜』を出版した**梅谷文夫**などは、その最たる者であり、ある意味で現代の奇蹟でもある。

榑齊の評伝を志し果たせなかった**森鷗外**も、史伝三部作『渋江抽斎』『伊澤蘭軒』『北条霞亭』を通して、榑齊について詳細に書いている。『古京遺文』を絶賛した**藪田嘉一郎**や、**家永三郎**なども私淑者のひとりであろう。